

2012年 白道会大会

正義は負けろ

—NHK 心の時代司会 亀井 鑛 先生—

去る八月十九日・二十日、蔵本通支坊で白道会大会が開催され、NHK心の時代で随時司会を務める亀井鑛先生におこしいただきました。大会期間中開催される公開講演会は、社会に開かれたお寺を目指して今年で十回目。約百五十名を超える参加者で本堂は満堂となりました。(以下は公開講演会の一部を要約)。

一門徒として

私が身につけているのは門徒輪袈裟(本願寺派では門徒式章という)といひまして、私はこれ以上のものをかける資格のない、一在家門徒で、皆さんと同じ生徒の立場でございます。今まで五十年聞法を続けてまいりましたが、今日は同じ門徒同士として、ざつくばらんに聞きいただきました。



亀井鑛 (かめいひろし) 先生

いと思います。

聞法のきっかけ

仏法を聞く以前の私は、お寺とは全く反対の方向を向いていました。仏教なんてものは世の中に何の役に

立つものではないと、白い目でながめていて、お世話になつたお寺のご住職に言いたい放題言つて楯突いていました。ところがご住職は、そんな私に対して不機嫌になつたり顔色変えてしかりついたりなさらなかつ

たんですね。「いやあ、あなたの仰有ることよくわかる、私も実はお寺が嫌いで、後を継ぐのが嫌で、宗門の

生活体験を通して学ぶ

今ふり返つて思いますのは、毎月毎月お寺へ通つて、ご住職ご自身の生活体験の話をお聴きして、生活の中の体験を通して学ぶことが非常に大切なことだと思います。

ある時ご住職は、バスの中でお婆さんに席を譲つた。ところがそのお婆さん、降りる際に御礼も言わず、立っているご住職ではなく自分の友だちに席を譲つて降りていった。「なんとというクソババアだ。」その姿を見送つた次の瞬間、ご住職はハツと気づかされた。

日頃お寺で、「人間というものはいつでも自分を真っ先に押し立てて、そして自分というものを中心にして物を計つてゆく、得手勝手な横着がままな人間の

根性というものを自力のほ
 からの、自力の執心といっ
 て、人間の一番苦しみの元
 迷いの元だ」と聞いて、ま
 た話しておりながらも、自
 分自身それをやっておつた
 じゃないか。なんという恥
 ずかしい私であったことが。

その瞬間、おばあちゃんを
 憎む心がふつと消えて、あ
 ますまなんだ、心の中で頭
 をさげている私に帰らさせ
 てもらった、ということだ
 した。

南無阿弥陀仏とは

自分がいつでも正しい、
 お前が悪いと人ばかり責め
 めていた私の根性、また今
 日もやった、そのことに気
 づかされて、ああ愚かな私
 でありましたと頭が下がる、
 これが南無阿弥陀仏の「南
 無」ということ、そこに本
 当の人間の生き方に帰らせ

ていただけ、これを「阿
 弥陀仏」という。南無阿弥
 陀は、本当の人間のありよ
 うに帰ろうではないかとい
 う、仏の呼びかけの言葉な
 んですよ、毎回体験を通
 しながらお話を聞かせい
 たいただきました。

—これは今日の私たちに
 一番欠けている、根本的な一
 点だ。私はとんでもない思
 い違いをしておつた—とい
 うことから、私は仏法とい
 うものに五十年、真向きに
 向き合っていました。

正義は負ける

それで、正義は負ける
 というこの題、分りにくい
 ですね。どうして正義は負
 けなければいけないのとい
 うことがあります。この言
 葉は金子大榮先生がおつし
 やった、『今なぜ親鸞か』亀

井鑛著・樹心社)に出てお

りますので、ちよつと読ん
 でみましょう。(以下引用)
 浜松市の郊外、遠州灘の
 海辺に面した大須賀とい
 う町のお医者で、永尾雄二郎
 さんという方がおられます。
 学生時代から仏法を学んで
 いらつしやう。とりわけ
 京都の金子大榮先生にすつ
 と親しく教えをいただいた
 おられました。

ある休診日の夜、表戸を
 ドンドンたたくので出てみ
 ると、四十年配のサラリー
 マン風の男性が、近くの料
 理屋で酒を飲んでいて気分
 が悪くなり、この医院を
 教わつてきた、という。休
 診日だけれど、応急処置だ
 けでもと頼まれ、強心剤の
 注射をしてあげたら、「おか
 げで気分がよくなった」と
 車で帰宅された、といいま
 す。

一月くらい経つて、突然
 家庭裁判所から呼び出し状



公開講演会の様子。満堂の参詣者

しろうと判断による誤解だ
 から、却下してやつて」と
 いうと、そういう言い分は
 法廷で述べなさいと、いそ
 がしい中、何度も裁判所へ
 通わされたそうです。裁判
 所では、「相手はお金で解決
 といっているし、お医者
 は金持ちだから、お金で解決
 するのが一番」と、しきり
 にすすめる。弁護士に相談
 したら、「これは絶対に勝て
 る。近頃は、こういう職業
 的な弱味につけ込んで、い
 ろいろ理由をつけて、取れ
 るものは取らなきゃ損とい
 った風潮が目にする。今回
 の場合がそうだとはいえな
 いけれど、社会正義の立場
 からも、断乎拒否しなさい」
 といった成り行きで、永尾
 さんも、びた一文も払わな
 いという肚を決めた、とい
 います。

ところがこの話が金子大
 榮先生の耳にまで届いた。

がきた。開くと、その休診
 日に来たサラリーマンが帰
 宅して、「あそこのお医者で
 処置してもらったら治った」
 と、自分の部屋へ入ったき
 り出てこないの、家人が
 見に行ったら、部屋で亡く

なっていたという。これは
 その時の注射のせいに違
 ないと、損害賠償とか慰謝
 料を請求する裁判だとい
 うんです。先生は、「そんな
 強心剤の注射で死ぬなんて
 こと、医者の間なら問題外。

先生は九十歳代半ばで、もう耳が聞こえませんが、事が事なので京都から電話で、「永尾さん。裁判に出られるそうだが、自分が悪かったというのを忘れずに、行ってください」と、いうだけいって電話が切れた。いいたいことはいっぱいあったけど、金子先生には、お耳が悪くて通じません。その日も裁判に出る日でしたが、先生の「自分が悪かったというのを忘れずに」の一言が耳から離れず、結局、徹底抗戦の構えから一転して、全面的に相手の言い分を受け入れて、お金を払って和解した、といわれます。

義の名において、断乎筋を通す必要がある。こちらに何の落度もない。びた一文も私わんでいい。徹底して戦おう、これが世間常識。それならよくわかりますね。ところが仏法では、「自分が悪かったというのを忘れずに」といわれる。こちらに落度はない上に、当節こうした、取れるものは取るの風潮が横行しているのに一矢を報いるのは、社会正義の立場からも当然、望ましい態度でないのかと思えますね。どうしてこちらが悪いと思わなきゃならぬのか、首をかしげさせられま

すね。私もその点を、永尾さんにおたずねしました。そして、永尾さんはこういわれました。金子先生は常日頃から、「われ正しと思わば負けよ。さすればそこに平和あり」とか、「正義は負け

ろ」とおっしゃっていらした。今回の事件でも、こちらに落度はない。むしろ相手の側に誤解がある。でも、正義は我にありと主張するとき、相手を文句なしに悪者にしてしまっている。そのときこちら側にある、傲慢といつてもいい姿勢の高さ。これはもう先生がおっしゃる「私の方が悪かった」の一つでないか。そして頭ごなしに相手を悪いと決めつけるときには、働き盛りの大黒柱を失った遺族の人たちの悲しみ、苦しみ、やり切れないさを、全然眼中に入れない冷酷残忍さがあるのではないか。正義をタテにとる者の惨酷さ、これも「私が悪かった」の一面でないかと、私は金子先生のお心を、自分なりに解釈しています。そして「どこまで戦うぞ」と争い続けるところには、こちらもどげどげしい、戦闘的な身構えで、憎しみと怒りで我を忘れた泥沼にはまり込んで、傷まみれになり、くたびれば、て、自分も相手もズタズタになってしまふ。それを思うと、相手も満足でき、私も心安らいで、こういう形で解決できてやはりよかった、今でも思っています。(以下略・引用終わり)

夜席からの法座では、「愚者往生道」として、以下のようなお話も下さいました。

ただ漫然と如来さまの前で手を合わせていたってだめ。自分を見せてもらった時にはじめて如来さまと出遇えるんです。罪悪深重、煩惱具足の凡夫の自分と出遇わせてもらうと、初めて如来さまと出遇わせてもらえる。こういうことを現代の私たちはしっかりと聞き分けていかないと、いつまでたっても仏法は分かりませんよ。お寺で口先だけで調子を合わせてするお念仏で一生終わってしまう。そういうお念仏やっていて、私たちが在家の人間は何にもなりません。お寺はそれで儲かるでしょう。だけど私たちが在家は「虻蜂とらず。何にもなりません。だから本当の手応えのあるお念仏をもらってください。それは真剣勝負です。ご住職と。それをやらなくちゃいかに(終)。

誓子の日記

今年の夏も暑かったですね。■中一の学(二男)は、学校は違うもののお兄ちゃんと同じ部活に入り、日焼けして真っ黒けになりました。■小六の遊(三男)は相変わらずマイペース。呑気にごろごろして暮らしています。■ちよつと前の話ですが、三男遊といっしよに算数の勉強中、遊が私に質問しました。遊「お母さん超と真ん中つてどういう意味？」私「????」問題を見るとこう書いてありました。「A地点から兄が、B地点から弟が発発して、ちよつと真ん中から百五十メートルのところに出会いました。」

わはははは(笑おしまい)。